

タイトル 疑い得ないものは真ではないのか？

副題 ウィトゲンシュタイン著『確実性について』の第205節という落とし穴

氏名(所属) 橋本 正吾(関西学院大学)

ルードヴィヒ・ウィトゲンシュタインの最晩年の著作である『確実性について』(*Über Gewißheit*)には、Andreas Krebs (Krebs, A. 2007, p. 122)が指摘するように、二つの矛盾する考察が記されている。両考察は、第341節で「蝶番」と呼ばれるものに関わる。この「蝶番」には例えば「地球が存在している」といった私たちの日常の観点からは明白である言明が含まれる。「蝶番」はいわば「私たちの言語ゲームの土台に位置する」(第204節)ものであり、その土台には正当化の必要性もなく、何らかの疑いの余地もないわけである(cf. 第341節)。

さて、この「蝶番」について述べられる一つ目の考察は第83節に見られるように、それが真である、というものである。一方で第205節では、「理由づけされたものこそが真であるならば、土台は真でも偽でもない」と述べられる。「蝶番」はこの「土台」に位置するわけであるから、正当化をされていない「蝶番」は「真でない」ことが第205節から帰結し、それは第83節の考察と矛盾することになる。では、一体どのようにして、第83節と矛盾する第205節を扱えばいいのだろうか？この矛盾の解決は容易な問題ではなく、様々な解釈を呼びうる。だからといって、「蝶番」という概念は『確実性について』における重要なテーマであるため、第83節や第205節を無視することもまた当著作の読解上の問題となってしまうだろう。

実際に多くの二次文献では、特に第205節の考察が重視されており、上記の矛盾を解決するための多種多様な試みがなされている。代表的な例は第83節の考察を棄却し、第205節を擁護するものである。例えば(1)「蝶番」は真理値を持つような命題と言えるものではない、(2)「蝶番」は命題であるとしても、記述的(descriptive)ではなく、規範的(normative)な命題であるため、一般的な意味での真理値を持たない、あるいは(3)第83節と第205節を執筆した時のウィトゲンシュタインの考え方が変わり、第205節の考察の方が正しい、などの解釈がある。また、(4)第83節と第205節の両節を正しいものと見なした上で、「蝶番」に含まれる「地球は存在している」などの命題は真であるが、命題の形を取らない「土台」は真ではない、という解釈もある。けれども、直後の第206節では、やはりその「土台」が「真であること」が示唆されており、この考察も第205節を肯定する解釈とは相入れないことも考慮に入れるべきである。

以上の状況を踏まえて本発表では、第一に相矛盾すると思われる第83節と第205節の二つの考察を『確実性について』のテキストに沿って概観する。第二に、第205節を中心に、上記に挙げたような主要な二次文献の多様な解釈を例示する。第三に、第205節がウィトゲンシュタインおよびテキストの編集者によって図らずも読解上の落とし穴になっていることを示し、第205節に基づいた種々の解釈の問題点を挙げることを目的とする。その上で、本発表では第205節を批判的に捉えた自身の解釈を提示することで、『確実性について』の研究・読解の一つの指針を示したい。

本要旨の参考文献

Krebs, A. *Worauf man sich verlässt: Sprach- und Erkenntnisphilosophie in Ludwig Wittgensteins »Über Gewißheit«*, Würzburg: Verlag Königshausen & Neumann GmbH, 2007.

Wittgenstein, L. *Über Gewißheit*. In: *Werkausgabe*, Bd. 8, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag, 1984, pp. 113-257. (本要旨の「第某節」の表記は『確実性について』の該当節を指す。)